

『稿本天理教教祖傳』の122頁に、

更に、十二月二十六日（陰曆十一月十八日）、教祖は、初めて赤衣あかきを召された。この赤衣の理については、

いまゝでハミすのうぢらにいたるから  
なによの事もみへてなけれど 六 61  
このたびハあかいところいでたるから  
とのよな事もすぐみゑるで 六 62  
このあかいきものをなんとをもてゐる  
なかに月日がこもりいるそや 六 63

と、お教え下された。神から月日へと文字をかえ、身に赤衣を召されて、自ら月日のやしろたるの理せんめいを闡明された。

これ、ひとえに、子供の成人を促される親心からである。

と記されています。

教祖はそれ以前には、黒い着物に白糸で三つ菊の紋付を着ておられたと伝えられますが、明治7年の末から、下着から羽織り、下駄の鼻緒やお座りになる座布団まで、赤一色になされたのであります。

明治7年は、教祖が数え77歳になられた年で、一般世間で言う喜寿になられたのですが、年初の喜寿の祝いに赤衣を着られたのではなく、年末の12月23日に奈良県庁の社寺係からの呼び出しで、山村御殿（円照寺）に向かれた直後の26日より赤衣を召されるようになったのです。（『稿本天理教教祖伝逸話篇』57頁「35 赤衣」参照）

教祖が赤衣を召された理由の一つは、「身に赤衣を召されて、自ら月日のやしろたるの理を闡明された」とあるように、中山みき様の身の内に「月日が籠もり居る」ということを、周囲の人々の目に見えるかたちで示された。つまり、中山みき様が普通の人間とは違うことを目で見えるようになされたということ。そして、もう一つの理由は「御簾の内から外へ出てこられた」ということを示すこと。つまり、月日親神が、幽界より顕界に出てきた、表に現れてたすけを始められたことを象徴したということでありましょう。

前述のように、この時期は、本教が国家権力による干渉・弾圧を受け始めた時期であります。後の明治19年の最後のご苦労の時に、警官が「老母に赤衣を着せるから人が集まって来るのである」と言いがかりをつけて、樺本分署に拘引中の教祖に黒紋付きを差し入れた、という史実があるように、赤衣を召されることは官憲を刺激する種にもなったのであります。しかし、その中、教祖は敢えて真っ赤な着物をお召しになって通られたのであります。

『稿本天理教教祖伝逸話篇』（197～198頁）の中に、親に連れられておちばがえりした5、6歳の子供が、赤衣を召されていた教祖にお目にかかって、当時たばこ屋の看板に描いていた姫達磨を思い出したのか「達磨はん、達磨はん」と言った云々、という話が載っていますが、赤衣を召された教祖は、正に店の看板のように目立つお姿で過ごされるようになったのであります。

国家権力に弾圧を受けた人や集団は、歴史上にも多くありましたが、そういう人達は皆、弾圧を逃れて地下に潜りました。

政治結社や宗教団体も、圧倒的な力を持つ権力側に反旗をひるがえす時には、権力側に自分たちの顔を見せないようにするものです。ヘルメットやマスクで顔を隠すデモ隊、目出し帽を被ってしか人前に出てこない隠れアジトを持ったカルト教団など、皆が表に出ずに陰に隠れようとします。こういう人たちは、権力側より自分たちの方が正しいと主張してはいるけれども、一方では、権力を怖れているし、自分の命も惜しいから、相手に自分を認識されるのは不都合なのです。

しかるに、教祖にとっては、国家権力を嵩に自分を拘束しようとする人物であろうが、自分たちの立場が犯すのはけしからんと追ってくる医者や神官・僧侶であろうが、どんな敵対行為をしてくる人たちでも、皆「反対するのも可愛い我が子。」なのであります。相手は教祖を取り締まりの対象・排除すべき存在だなどと思っけていても、教祖にすれば、皆抱えて通る人たちなのであります。“相手と自分のどちらが勝つか”などと、同じ土俵で敵対する関係ではないのであります。

ですから、教祖は、どんな時にも絶対に逃げ隠れはなさらない。警察が踏み込んで来たから裏口から逃げ出されたとか、秘密の隠れ部屋に潜っておられたなどということは全くないのです。逃げ隠れするどころか、赤衣を召されて「自分はここにありますよ」と手を上げているようなことをなさる。赤衣を着ることが国家権力など周囲の反対勢力を刺激することを心配するより、「月日のやしろ」の立場を闡明にすることの重要性を示されたのです。このような振舞いは、当時の社会環境においては命がけのことでしたが、しかし、生命を司るのは親神様であって人間ではない。ですから、官憲に逆らったら抹殺されるなどと、教祖御自身が怖られる必要は全く無かったのです。

換言すると、月日のやしろたる教祖は、法律や権力を超越した存在であり、人間社会の決まりや常識に束縛されることはないということ。つまり、教祖は、親神様の思召以外の誰の思惑・信条や決まりにも左右されないことを、赤衣を召して明らかにされたのであります。

それは、また、お道の世界ですが、革命や選挙などで政治権力を握ったりして、社会の組織や体制を覆すという方法でなされるのではなく、「親神への信仰によって、世界一れつの心が澄み切る」ことによって達成される—世直しではなく、世直しによって陽気ぐらし世界を実現する—のだということを示しておられるとも悟れるのであります。

赤色の意味を辞書に求めれば、「火の燃える・混じりけが無い・中心にあつて大切な・なにもないむきだし」などの意味があるとされています。そして、その赤い色の心は、梅谷四郎兵衛手記に、「大神の御告げに依りて赤き色の神の心に通う事を知れ」ともあるように、赤心=偽りのない心・まごころが、親神の心に通じると教えられているのです。

後年には、赤衣は、教祖存命の理のシンボル、あるいはまた、講社の「めどう」という意味も持つようになりましたが、天理教が「世界究極の教え」たることを闡明するために、教祖は赤衣を召されたのであります。